

日原利国著『漢代思想の研究』

著者	浅野 裕一
雑誌名	集刊東洋学
巻	57
ページ	130-141
発行年	1987-05-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132391

 評書

日 原 利 国 著

『漢代思想の研究』

浅 野 裕 一

第二部

- 五 春秋公羊学の漢代的展開
- 六 王道から霸道への転換
- 附 華夷觀念の変容

一 『塩鉄論』の思想的研究

二 『春秋繁露』

三 『白虎通義』研究緒論

——とくに礼制を中心として——

四 白虎観論議の思想史的位づけ

五 王符の法思想

六 荀悦の規範意識について

附

一 「書は心の畫なり」の解釈への疑問

二 『宣和書譜』成立考

三 『続書断』初探

漢代思想研究の泰斗、故日原利国氏が急逝されたのは、一九八四年六月二十一日のことであった。本書は、日原氏の遺徳を慕う友人や門下生の手により、生前の論考十六篇を選んで編集されたものである。その内容は、著者の本領たる漢代思想史関係の論文十三篇と、書道辞典の刊行を企画されるほどに深い関心を寄せられていた、書道史関係の論文三篇とに大別でき、具体的な内訳は以下のごとくである。

第一部

一 中世（前期）の思想

二 漢代思想研究の現況

三 災異と讖緯

——漢代思想へのアプローチ——

四 漢代の刑罰における主観主義

——『春秋』と刑罰との関係——

この中書道史の領域は評者の手に余るため、論評の範囲を漢代思想に関する論考に限らせていただく。それでは以下順を追って各篇の概要を紹介しつつ、併せて評者の感想をも記すこととしたい。

巻頭の「中世（前期）の思想」は、『中国文化叢書・第三巻・思想史』（大修館書店）の中で、武帝期から後漢末まで

を分担執筆し、この時代の思想史を通観したものである。この中で著者は、董仲舒が公羊学に天人相関・災異思想を導入したのち、漢代の儒学がその神秘主義的傾向を一層深めていく経緯や、今古文の論争を軸に経学が形成されていく過程、その一方で後漢の礼教体制の權威を批判する思想的系譜が展開していく状況などを、歯切れの良い筆致で手際鮮かに叙述する。論旨の運びはまことに明快で、漢代思想史の主要な流れを理解する上で、絶好の解説となっている。

もつとも評者には、些か不満な点もないわけではない。著者は第一節「儒教の国教化」において、儒教的倫理を奉ずる農村共同体の論理を、絶対主義的な国家權威の承認に転化し、露骨な支配意志を儒教により粉飾せんとする権力側の意図と、『春秋』を利用して強大な君主権の根拠づけを行って、時代の要請に巧みに応えつつ、それを代償に儒教の保護を求めんとする董仲舒の意図とが合致した点に、儒教国教化の最大の原因を認めている。

こうした著者の把握は、大筋では確かにその通りである。ただし、武帝が儒教を強権支配の粉飾装置として採用するまでには、皇帝が官僚組織を統御して郷里共同体の末端までも、一元的に直轄統治せんとした、秦の法術的支

配形態や、皇帝より派遣された官僚が各地域の有力者たる豪族や游俠を媒介に、より間接的に郷里共同体を統治せんとした、漢初の黄老的支配形態の段階を経ている点にも配慮する必要がある。漢の皇帝権力には、秦の法治主義を否定して、それと相反する支配原理を標榜すべき必然性が存在したことは、著者も言及するところであるが、歴史的事実としては、秦の法術的支配から一挙に儒法折衷の支配へと転換したのではなく、その間に黄老的統治の時期がおよそ七・八十年に亘って存在している。そして結果的にはこの段階が、前記の移行を橋渡しする積極的役割を果たしている。黄老道の流行なくしては、あのような形で儒教国教化もありえなかったとすら言える。

著者が分担したのが武帝期以降である以上、漢初の叙述が簡略であるのも、また已むを得ぬところではあろう。しかしながら、文景期における道家（黄老）思想に対する意義づけを、いまだ中央集権的支配が不可能であったために、「無為清静」を余儀なくされた事態をカバーする理論である、との消極的評価に止めている点には、やはり物足りなさを感じる。当時の道家の実態把握や、秦・漢西帝国の性格的差異、漢初に漢の皇帝権力が抱えていた特殊な歴史的状况などを踏まえた、より突っ込んだ考察が欲しかったと

ころである。

「漢代思想研究の現況」は、『アジア歴史研究入門・第三卷・中国Ⅲ』（同朋社）に収める「Ⅳ 思想史（Ⅰ）——春秋戦国と秦漢——」の一部、「3 漢代の思想史」を改題したものである。この中で著者は、「漢初の動向」「討論集会」「神秘説」「異端思想」の四項目を立てた上で、漢代思想研究の現状を解説しており、これから研究を始めようとする初学者には、恰好の手引書と言える。また個々の研究成果を紹介するに当り、著者は自己の評価を如実に示す修辭を混じえており、この点では専門の研究者にとっても、著者の嗜好を窺うことのできる興味深い内容となっている。もとより、初出からすでに四年ほどが経過しており、優れた研究成果でありながら、ここに漏れている論考も多いであろう。

「災異と讖緯——漢代思想へのアプローチ——」は、『東方学』第四三輯に発表された論文である。この中で著者は、元来董仲舒が提唱した災異説は、君主の過去の行為への天譴として、専制君主を抑止する機能をも保持していたが、それが『易』や『公羊伝』の影響下に、未来を予言する術へと変質したことにより、君主譴責の使命を喪失して墮落して行ったと説く。また災異説は哀平の際に出現し

た讖緯説と結合して、災は過去の失政への譴責、異は未来の予兆と、災と異を区分する何休の説や、同一の前兆現象を災異と瑞祥の双方に解釈する何休や鄭玄、『駁五經異義』などの新説を派生させつつ、より一層神秘的・予言的性格を強めたが、その背景には、古文学の抬頭に直面し、すでに学問的生命が枯渇状態にあった今文学が、後漢王朝の權威を神秘化するという宗教性を導入する方策により、自らの再生を図らんとする動きが存在したと指摘する。これは、儒学が国家主義化を果たすために、とめどなく神秘主義へと傾斜していった経緯を、儒学と国家権力との共利關係、今古文の論争などを軸に考察した、卓見に富む研究成果である。

ただし評者には、幾つかの疑問なり不満も残る。その第一は、災異説を理論化したのは董仲舒に始まる、と記す点である。著者は災異説の先蹤として、僅かに『呂氏春秋』や文帝二年と後元年の詔勅の名を挙げるが、これでは災異説の展開を辿るには不足であろう。異変現象の背後に、それを支配する有意の天を想定する思考は、『左伝』『国語』や『墨子』、黄老道や鄒衍の思想などにも見え、とりわけ黄老道の災異説は、すでに陰陽思想をも取り込んだ体系的な理論水準に達している。前記の詔勅も、実は文帝が信奉す

る黄老道の理論を応用したものであつて、漢代の災異説を恰も董仲舒の創見であるかに説く従来の通説は、今後大幅な修正を要するであらう。

第二は、元帝以降の災異説が孟喜・京房の易学の影響を受けて予占化した、とする点である。これは漢代の儒学内に視野を限定し過ぎた立論であつて、範圍を災異思想全般に広げるならば、馬王堆漢墓出土の帛書『五行篇』に「禍ありて之れを知るは、天なり。禍とは、数を齎^{なま}うなり」(説26)とあり、『中庸』に「至誠の道は、以て前知す可し。国家将に興らんとすれば、必ず禎祥有り。国家将に亡ばんとすれば、必ず妖孽有り」とある他、戦国期の各種陰陽思想中には、すでに災異と予言とを結合する思考が明瞭に含まれている。そもそも天界の異変と予占とを結合しなければ、五徳終始説や陰陽流兵学などは成り立たない。この篇に限らず総じて著者の論述には、漢代儒学の枠内でのみ各種思想の展開を追わんとする傾向が強く、諸子学を含めた先秦の思想界の事情に疎い印象を受ける。

「漢代の刑罰における主観主義——『春秋』と刑罰との関係——」は、『愛知学芸大学研究報告』第十一号に発表された論文である。著者は、公羊学は漢代を通じて終始国家権力と癒着し、犯罪結果よりも罪人の動機を重視して量

刑する論理を、統治者側に提供したと言ふ。そしてこれが、善意を認めて寛宥する方向にはなく、専ら悪意を指弾して嚴罰で臨む方向にのみ、御都合主義的に利用されて、漢代を覆う主観的な嚴刑重罰主義の理論的支柱になったとも説く。これは、漢代に特徴的な『春秋』による治獄の実態を、公羊経学の教義と関連づけて考察した、特色に溢れた研究成果と言へる。

もっとも評者には、次のような疑念も生じた。武帝以前の歴代皇帝が、「今、誹謗詬言の罪有り。(中略)細民の愚は、無知にして死に抵る。朕甚だ取らず。今より以来、此れを犯す者有るも、治に聴くこと勿れ」(『漢書』文帝紀)「獄を治むる者をして務めて寛を先にせしめんと欲す」(同・景帝紀)と、秦の遺制たる苛法の除去に努め、すでに公羊学の採用以前から、民の情状を酌量して極力寛刑主義で臨まんとしたことは、周知の事実である。しかるに著者はこの点に一切触れぬまま、漢代の統治観が心意に踏み込む恣意的な嚴刑重罰主義で一貫していたかの如く論述する。これでは、漢の法治は秦の法治と全く同質であつたのかとの、素朴な疑問を禁じ得ぬであらう。

また著者は、専ら治獄の場での法吏の活動に論点を集中するが、まずその前に、法治の根幹たる法それ自体の性格

を廻る議論、すなわち法を国家や社会を運営するための客観的基準と見做すか、君主の支配意欲を遂げるための誘導技術と見做すか、自然法と実定法とはいずれが優先さるべきか、といった視点からの考察が必要ではなかったか。これらの諸点と建国より武帝期に至る歴史状況の変化とを総合的に考察したならば、秦の法術思想が持つ一律的な法実証主義の枠を超えて、漢の法治がその当初より動機主義と深く結合するに至った原因も、さらに鮮明になったであろうと思われる。

「春秋公羊学の漢代的展開」は、『日本中国学会報』第十二集に発表された論文である。この中で著者は、漢代の公羊学が、結果を重視する国家主義的な『春秋』解釈により、強大な君主権を是認する方向と、動機を重視する人民中心的な『春秋』解釈により、君主権を抑制する方向とを併存させていたと説く。その上で著者は、公羊学はこの国家主義と儒教主義とを総合し宥和させるべく、経文の拡大解釈を増殖させて行ったが、結局はこの試みも破産したとの結論を提示する。

行論の途中で前者を心意主義と換言して、後者の動機主義と対立させる点には無理もあり、前者は動機主義の国家主義的悪用とでも表現すべきであろうが、全体としては、

公羊経学の教義と漢の帝国統治との密接な関わりを、統治者側の経文解釈を中心に解明した力作で、煩瑣な公羊学に精通する著者ならではの優れた研究となっている。

「王道から霸道への転換」は、もとは『中国哲学史の展望と摸索』（創文社）に収められた論文である。孔子が条件付きで覇業を容認する態度を取ったにもかかわらず、孟子は王覇を峻別して霸道を全面的に排斥した。ところが荀子は、覇者を王者に劣る存在とはしながらも、その意義を再び肯定しはじめる。それが漢代に入ると、覇者は王者に至る途上にあるもので、両者の間に本質的差異はない、とする新たな王覇観が成立した。以上がここで著者が述べる王覇観の変遷である。と同時に著者は、荀子の王覇観は現象的には過渡的形態を示すものの、孟子の王覇峻別論を漢代の王覇等質論へと転換させるだけの論理を備えていない、と指摘する。そして理念上は覇業を否定しながらも、天子不在の現実的要請からは覇業をも是認すべしとする公羊学の論理こそが、前記の転換を可能にしたと説いて、王覇観の変遷に果たした公羊学の役割を強調する。これは、王覇観の変化を高祖評価や公羊学との絡みで漢代思想史中に意義づけた点で、斬新な視点を持つ研究と言える。

ただし例によって、著者の思索は儒学の内部に限定され

ており、一旦この枠を取り払ってみると、そこにはかなり違った結論も出てこよう。銀雀山漢墓出土の竹簡本『孫子』九地篇には、「四五の者、一として智らざれば、王覇の兵には非ざるなり。彼の王覇の兵は、大国を伐たば、則ち其の衆は聚まるを得ず。……」と、両者を同等に評価して連称する表現が見える。また『呉子』図国篇には、「三勝する者は覇たり。二勝する者は王たり。一勝する者は帝たり」と、やはり王と覇を単なる程度の差異として、連続的に把握する思考が見られる。さらに馬王堆漢墓出土の『経法』、『称』等の黄帝書にも、王—覇—危—亡との序列を設定し、覇主を王者に次ぐものとして肯定的に評価する論理が存在している。

こうした状況を踏まえるならば、王と覇を程度の差と見るのは、孔子や荀子に限らず、先秦の思想界の一般的傾向で、孟子の立場だけが突出して特異だった可能性も生じてくる。もしそうだとすれば、漢代の王覇等質論は、公羊伝の論理を待って出現した新説ではなく、敢えて例外的な孟子の説を採らずに、単に先秦の主流的な王覇観を踏襲したものに過ぎない、と考えることもできるかと思う。

「華夷觀念の変容」は、公羊学中の夷狄観を、通婚をも拒まぬ開放的な世界主義、中華文明を基準に受容と排斥を

併用する勸戒主義、武力によってでも断固排撃せんとする攘夷主義の三種に分類する。その上で著者は、対匈奴和親論者と武力討伐論者のみが対立する『塩鉄論』の構図が象徴する如く、漢代に入るや勸戒主義が消えて行つたと、戦国から漢に至る夷狄観の変容を跡づける。これは著者の絶筆となった論文であるが、未完に終つていてその全体的意図が不明なため、内容紹介だけにとどめさせていただく。

第二部冒頭の「『塩鉄論』の思想的研究」は、『東洋の文化と社会』第四輯に発表された、著者の処女論文である。

そもそも『塩鉄論』は、御都合主義的に各種思想を援用する大夫と文学が、次々と論点を変え、延々と非難を応酬しつつ、出口のない不毛の論戦を繰り広げた記録である。したがって、そこから両者の一貫した立場なり思想なりを抽出して、思想の書として取り扱うには、極めて煩雑な作業を要するが、著者はこうした厄介さを克服し、『塩鉄論』全体を見通す独自の視点を確立している。

まず「刑罰思想」では、文学が犯罪環境原因説、すなわち為政者が犯罪の温床たる貧困を除去し、人民の経済的充足を実現するならば、倫理道德は自然発生的に招来されるとの、犯罪社会学的立場を取ったとする。そして一方の大

夫は、犯罪者たるの素質は先天的に決定されるとの犯罪素質原因説の立場から、徳治による教化の有効性を否定して嚴重な応報刑罰主義を展開し、さらには威嚇による犯罪予防の見地から豪族に対する連座族滅政策を積極的に肯定したと述べて、両者対決の構図を明示する。

続いて「政治思想」では、塩鉄會議の争点であった対匈奴戦の遂行、及び塩鉄の専売による軍費の捻出との二大政策が、すべて国家権力側の豪族対策を焦点に構成されていたと指摘する。つまり、国家が塩鉄の利を豪族の手から奪い取る点により、豪族勢力を削弱して土地兼併の路を遮断せんとする点に、上記政策の眞の狙いが存在したと説く。これに対し文学は、政府の塩鉄政策は民衆に粗悪で高価な官製農器具の購入を強い、却って編戸の民の窮乏化を招いたに過ぎぬと批判して、その撤廃を要求したのだと言う。しかも文学は、人民への苛斂誅求によつてのみ存立する国家権力・支配階級と、その一方的被害者たる人民の利害とが背馳対立する点を鋭く看破し、反国家・反支配階級の勢力を代弁して、国家権力や支配階級のイデオロギーに妥協なき論戦を挑んだのであって、国家権力に迎合しそれを容認せんとする当時の儒教及び儒生一般とは、明瞭に一線を画す、純粹な儒教的理想主義の徒であつたと位置づける。

さらに「經濟思想」では、農本主義を唱える文学に対し、大夫は資本家的性格を帯びた国家権力による商人的政策を是認すべく、商業主義的經濟觀を鼓吹するが、それは富豪の横行を承認する結果を招き、疲弊・流亡した人民を豪族の傘下に追いやった塩鉄政策同様、豪族弾圧の目標とは相反する自己矛盾に陥つたと指摘する。

このように、商業行為や国家権力に対するほとんど生理的な嫌惡感に満ちた論述から察するに、著者の孔子時代の儒学に対する理想主義的情熱と、マルクスの階級闘争史觀とが著者の内面で結合して、それが儒教的理想主義と人民階級のイデオロギーとを一身に体现する文学像を造形せしめたものと推測される。個々の論旨の当否は一応措くとしても、研究の出発点に於ける著者の基本的發想を知る上では、実に興味深く、ここに見られる傾向はしだいに激越な氣負いを減じながらも、終生著者独特の思考の枠組みを形作っている。

『春秋繁露』は、『春秋繁露』（中国古典新書・明德出版社）に収める解題部分であり、董仲舒の略伝、儒教国教化の原因、春秋公羊学の特色、春秋学と漢王朝の結合關係などを簡明に叙述する。前年に大著『春秋公羊学の研究』（創文社）を出された著者の手に成るだけに、平易にして

要を得た解説となっている。特に董仲舒及び漢代儒学一般に課せられた使命を、権力への適応と抵抗の調整であったと記す一文からは、改めて漢代儒学への著者の屈曲した想いが窺えて興味深い。

些か無い物ねだりをするならば、果たしてどこまでを董仲舒の自著と見做し得るのか、古来議論の多い『春秋繁露』の資料的信憑性を廻る問題について、踏み込んだ考えが示されていない点は、著者こそ最も適任だったと思われるだけに、今となつてはとりわけ残念な気がする。

また、董仲舒が君主権の横暴や専断を規制するために用意したのが災異説であると、災異説の提出が董仲舒の側で一方的に計画されたかの如く説く点にも、些か不安が残る。董仲舒に対する武帝の策問中には、「三代命を受くるに、其の符は安くに在りや。災異の変は何に縁りて起こるか。

(中略)何を修め何を飭さば、而ち膏露降り、百穀登りて、徳は四海を潤し、沢は中木に臻り、三光全く、寒暑平らかにして、天の祐を受け、鬼神の靈を享け、徳沢は洋に溢れて方外に施し、延いて群生に及ぶか」(策問第一)、「今、陰陽は錯繆し、気は充塞して、群生の遂ぐることを寡く、黎民は未だ済われず」(策問第二)、「蓋し聞く、善く天を言う者は、必ず人に徴有り、善く古えを言う者は、必ず今に

驗有り」と。故に朕は天人の応を垂問す。(中略)今、子大夫は陰陽の造化する所以を明らかにし、先聖の道業に習う」(策問第三)といった具合に、天人相関・災異の理法を具申せよとの発言が頻出する。これによれば、そもそも災異説の提供を望んだのは武帝の側だったわけで、災異説提出の原因探究は、しきりにそれを誘致せんとした武帝側の意図をも含めた形で、今後再考されるべきであろう。

『白虎通義』研究緒論——とくに礼制を中心として——」は、『日本中国学会報』第十四集に発表された論文である。著者は白虎觀會議の目的を、表面上は家族道德を重視する今文学・公羊説で理論統一を図りながらも、内実には於ては君臣関係を絶対視する古文学・左氏説をも取り込んで、強力な集権体制を経学の面から根拠づけんとする所にあつたと説く。

こうした意図を端的に示すものとして、著者は主に天子と諸侯との関係を取り挙げる。後漢の公羊説では天子は諸侯を礼遇して純臣とはしないが、一方の左氏説は諸侯を天子の蕃衛・純臣と見做す。そこで『白虎通』は、原理としては公羊説を採りながら、父母に対する服喪を中断しての天子崩御への奔喪、天子の諡号賜与による諸侯への評定、世襲に際して義務づけられる天子への瑞珪の返還と天子よ

りの受爵、諸侯国の卿に対する天子の任命権などの論点に關しては、左氏説に接近して、諸侯を事実上は郡県制下の地方長官に過ぎぬ地位にまで落としたと言う。

かくして『白虎通』は、事々に天子の至尊性を強調し、『父子の恩』を『君臣の義』に、『親親の道』を『尊尊の義』の下に屈属させたが、それは「強幹弱枝」策によつて強力な集権国家を志向する後漢絶対主義の産物であり、公羊に対立する左氏を優れた統合といった形で包摂し得なかつたのも、白虎観會議なる歴史的時間での制約であつたとするのが、本篇での結論である。

これは『白虎通』の性格を、今古文論争と後漢の支配意図との絡みで分析した労作である。これに對して評者は、以下のような感想を抱いた。本篇冒頭で著者は、白虎観會議召集の意図を次の如く述べる。建武・永平の治を経て一応国家的基礎が安定したかに見える後漢も、実は当初より豪族勢力の制約下に置かれ、その全き権能を保持する諸条件が欠如していた。かかる欠陥の上に構築された国家が絶対主義を志向するとき、礼教国家の擬態が必要であり、そのためには天子のカリスマ的權威の確立と支配理念の統一とが不可欠となる。白虎観會議はまさにこの要請に応じたものであると。

そうであれば、天子の權威確立も支配理念の統一も、その最終目標は、皇帝支配が豪族勢力の障壁を打破して末端の人民まで貫徹する所に措定されていた筈である。しかるに本篇では、『白虎通』は専ら諸侯や卿大夫との關係に於てのみ、天子の独裁權力確立を主張したかに論じられる。そのため、著者が力説する礼教国家の擬態や後漢絶対主義の貫徹が、如何なる経路で豪族勢力抑圧に資するのかは、一向に判然としてこない。「緒論」のせいでもあるが、この点で本篇は、冒頭に掲げる白虎観會議の目的と、その後続く分析内容とが、必ずしも噛み合っていない印象を与えるであらう。

「白虎観會議の思想史的位置づけ」は、『漢魏文化』第六号に發表された論文である。ここで著者は、塩鉄論議を公羊学と法家主義との抗争、石渠閣論議を公羊学と穀梁学との抗争、白虎観論議を公羊学と左氏学の抗争と各々規定した上で、前篇での論旨を要約して示し、白虎観論議の性格を再確認する。そして塩鉄會議で法家主義と対立し、石渠閣會議で穀梁の攻勢を受けた公羊学は、すでにその頃から經文解釈の歪曲によつて国家主義への傾斜を見せていたが、白虎観會議ではそれが頂点に達し、公羊学は君主権の絶対化を理論づける思想へと明瞭に変貌したが、それは同

時に、経書の国家主義的解釈の限界・終焉をも意味していと説く。

漢代の三大論争を通観する形で、公羊学の国家主義的変容を跡づける本篇は、漢代思想史の大局の流れに対する著者の把握を、実に明快な形で披瀝する好論となっている。欲を言えば、石渠閣論議で穀梁の前に敗退した公羊学が、すぐに勢力を挽回できた原因を、単に刑名好みの宣帝の死に帰結させる点には、多少の不满が残ろうか。著者が穀梁学拾頭の時代的要因に挙げる、豪族の成長と農民の没落に対処する支配体制の強化は、必ずしも宣帝期に於ける一時的現象だったとは思われないからである。

「王符の法思想」は、『東洋の文化と社会』第六輯に発表された論文である。本篇では、和帝から桓帝に互る後漢の凋落期を生きた、『潜夫論』の著者王符の法思想が論じられる。

王符は人間を上智・下愚・中庸の三種に分類した上、下愚を先天的・素質的な悪人と見る立場から、これに対する教化・善導の可能性を否定して、国家・社会からの永久隔離、即ち嚴刑重罰主義による誅滅を唱えた。この見解は夷狄にも同質に拡張され、王符は夷狄に対する懐柔・同化の可能性を否定して、武断的攘夷主義を導き出す。

その一方で、圧倒的多数を占める中庸の民に対しては、彼等は正邪双方の因子を併せ持ち、いずれに赴くかはすべて後天的条件に左右されるから、重賞と酷刑を併用する法術の運用により、善なる方向に強制・誘導すべしと主張した。

ただし王符は、かかる統治手段は飽くまでも「乱国」なる現実に対処せんとする權変に過ぎず、原理的には道德を法刑に優先させるべきだとする、儒教的理想主義の立場に立っていた。こうした現実主義と儒教主義の並立が、一方で法の客観性や刑罰の必行を強調しつつ、他方で犯罪に対する経済環境要因説や、それと連携する形での心意主義や道德的教化を説く、彼の現実主義の限界ともなった。

以上が著者による王符理解の概要で、先行研究の乏しい王符『潜夫論』に関する専論として、貴重な価値を有する力作である。総じて著者は、王符に極めて同情的で、彼の現実主義的・法家的側面の内容は、かつて著者の痛罵を浴びた『塩鉄論』の大夫の立場とほとんど同一であるにもかかわらず、それは後漢末なる余りにも悪過ぎた時代による制約のせいだとし、王符の思想の根本が儒教的理想主義にあった点を指摘して、彼の魂を救済せんとする。

したがって、かねての持論よりすれば否定的評価が避け

がたい思想内容を論じた後は、法家と儒家を混淆させる思想家との汚名を晴らさんとする意図から、次々と論点を儒家的方向へと移行させる。それにつれて王符の法思想の性格も、強制手段としての法術から客観的基準としての法へ、法実証主義から心意主義へ、実定法から天の威命を奉ずる自然法に従属するものへと、めまぐるしく変容する。個々の論述に限れば、王符への弁護としてそれなりの説得力に富むが、それらを総合した場合、そこには如何なる法思想の体系が浮上するのか、最後に全体的構図をまとめて欲しかった気もする。恐らくはそれによって、著者が本篇で見事に描き出した、現実と理念との狭間で苦悩する王符の思想的當為が、慎到や黄老道の道法思想や商鞅・韓非流の法術思想など既成の各種法思想を、儒家的徳治主義をベースに巧みに折衷・融合した、それなりに精緻な法思想の体系として結実した点も、より一層明確になったと思われる。

「荀悦の規範意識について」は、『東方学』第十八輯に発表された論文で、『申鑒』や『漢紀』の著者として、後漢の滅亡に立ち会った荀悦の思想が考察される。

荀悦は、儒学の個人的実践道徳をそのまま為政の準則としたが、彼が説く「道」概念中には、礼典の規範性のみならず、適宜変通の観念も内包される。この基本姿勢が、為

政の手段として徳教と法刑の併用を説く徳刑二元論や、性三品説の立場から、君子には礼を、小人には刑を適用し、中人には刑礼を併用すべしとの統治論へと展開する。さらに賞罰論に関しても、その時々々の国家的利害を最優先させる国家中心主義の判断形式により、動機主義と結果主義を併用する矛盾が、適宜変通の名の下に解消される。また州牧の蟠踞や豪族の跋扈に対しても、国家主義的偏向から非難・糾弾を加えつつ、最後は時宜の名の下に妥協の論理を用意する。

ところが、家族道徳と国家道徳との先後を論ずる段になると、俄然荀悦は家族道徳を絶対視する立場を固持せんとする。つまり荀悦の思想は、基本的には家族道徳に至上の価値を認めながらも、現実の場に於ては国家主義と儒教主義の並立に執拗な努力を繰り返したもので、一見論理の徹底性と一貫性が欠き、立場の脆弱さや思想の曖昧さとの誤解や非難を免れぬであろう。以上が本篇の要旨である。

本篇冒頭に於て、著者は荀悦に対する問題意識を次のように開示する。荀悦は曹操に招聘されて官界入りした後、今度は献帝の寵愛を受けて曹操の専権に義憤を抱いたが、曹操の篡奪には何らの諫言もなせずに、逆臣に仕えて天寿を全うした。かかる権力への追従とも解される進退に対し

て、忠実な孔子の徒を自任する荀悦は、如何なる弁明を用意したであろうか。

かかる自らの問題提起に対して、以後の論述は何一つ答えることがない。そこにはただ、荀悦の矛盾に満ちた個々の主張が、相互の脈絡を欠いたまま羅列的に投げ出されるのみである。しかも著者は、それが本質的矛盾であるかのような、だがそれは単なる誤解で、実は首尾一貫した主張でもあるかのような、至って曖昧模糊とした表現のまま稿を終えている。研究の乏しい荀悦の思想に筆を染めた点は、先駆的業績として高く評価すべきだとしても、やはり龍頭蛇尾の感を免れない。著者の綿密に構成された他の論考と比較して、恐らくは最も不出来な部類の作であろう。

もつとも、初めの方に問題解決の端緒をつかむといった表現も見えることから、著者は荀悦研究に関する雄大な構想を抱いておられたと想像される。してみれば惜しむべきは、著者のあまりに早すぎた長逝であろう。

經学は労多くして功少ない。著者はこの難事に営々と邁進され、春秋公羊学を中心に据えた重厚な学風により、斯学に不滅の足跡を記された。今後漢代思想研究に携わる者は、必ずや本書を指針の一つに仰がねばならぬであろう。

評者は著者日原利国氏より、生前望外の御厚情を賜った。その大恩に些かでも報いるべく、全力で本書評に取り組んだつもりであったが、菲才の身は所詮如何ともし難く、結果は誠に拙いものに終ったようである。

軽々しく塚の中を議した書生の客氣に対し、著者は豪傑の呵呵大笑で応じられるであろうか。それともついに微言から大義を汲み取れぬ浅学の徒に、憐憫の笑みを投げかけられるであろうか。

（研文出版 一九八六年二月 四四一頁）
九、〇〇〇円